



人物編

平成30年に制定された「ゆたさむらビジョン」の5つの基本施策に関する分野で活躍する読谷村の次世代を担う方々にお話を伺いました。

- フンシ トウシナティ ユチユチ トウク
- ① 風水として悠々と暮らさ(自然と調和した潤いのあるむらづくり)
伊波 克典氏
 - ② ちむ清らさあるひとの学び育ち(夢を育み生涯輝けるひとづくり)
鈴木 理美氏
 - ③ 御真人や笑い誇て健康の村(未来が輝くハツラツむらづくり)
島袋 孝子氏
 - ④ 互いに勢い起ち黄金花咲さ(人集い活力と魅力あふれるむらづくり)
知花 竜氏
 - ⑤ うち揃て創らな平和の世(平和で平等な協働のむらづくり)
多和田 友氏



伊波 克典

- グローバル・フットプリント・ネットワーク 研究員/アジア地域プロジェクト推進担当
www.footprintnetwork.org/
- 農業経営者(トルコギキョウ)
www.facebook.com/183farm/



プロフィール

1973年読谷村伊良皆生まれ。琉球大学、サンタモニカ・カレッジ、沖縄国際大学大学院(環境経済)を修了後、2008年米カリフォルニア州にある国際シンクタンク「グローバル・フットプリント・ネットワーク(GFN)」に就職。専門は、環境負荷の影響を包括的 値化する「エコロジカル・フットプリント」分析。2013年、結婚を機に帰国。活動拠点を読谷村に移し、引き続き、GFNの研究員として国内外のプロジェクトに従事。2017年からは研究職と並行し「トルコギキョウ」栽培を開始。(読谷村在住)

農業と環境が繋がるデザインへ。

それは資源を巡る紛争から始まった。

「沖縄の過去、現在、未来の出来事を米国側は実際どう考えているのか。それが米国の短大で学んだきっかけです」。穏やかな表情だが開口一番、伊波克典さんは自信をみながらこう言い切った。「資源を巡る紛争を防ぎ世界がバランスよく動くためには、沖縄も持続可能な発展をしていくことが大事です」。

そこで出会ったのが『エコロジカル・フットプリント(エコフット)』。エコフットとは私たちの消費行動を支えるための生態系サービスの総量を数値化する方法です。それを『バイオキャパシティ(地球が1年間に生み出す生態系のサービスの供給量)』と比べることで地域の持続可能性を計るのが私の仕事です」。

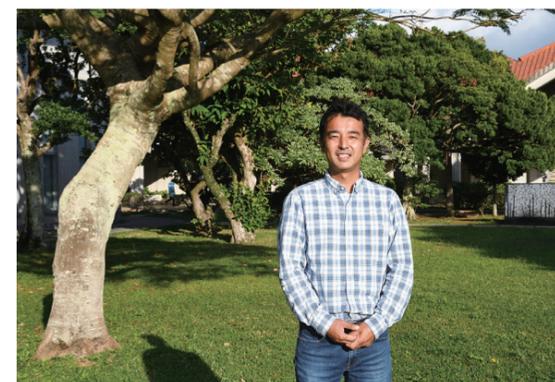
人と人が近く村民の生活を全部見渡せる。

「読谷村の魅力は、人と人が近いということ。そして村民の生活を見渡せることです。しかし、確かにひとの繋がりはありますが、点と点が分

断しているのではないかと。それを繋げることができるのは、じつは村外からの人のような気がします。点と点をつなぐ専門家が必要ですね」。鋭い意見を出す伊波さんだ。

環境と農業を“新しいデザイン”でつなげる。

「デザインは社会や価値観も変えます。例えば、読谷村は“影”が少ない。植樹でつくった“影”をデザインすることで読谷村に対する人々の意識も変えられます。また村の地形と季節ごとの風の流れを意識した立体感のあるランドデザインも面白いのでは」。さらに話をすすめる伊波さん。「帰国当初、自分が信じていた研究のエコフットを農家の方に伝えきれませんでした。農業と環境問題を分けていたんですね。農業はバイオキャパシティを支えています。将来的には、エコフットと農業を物語性のある“新しいデザイン”でつなげ、発信していきたいですね」。伊波さんは現在、自らも“トルコギキョウ”の栽培にも取り組み、農業とも直に関わっている。



“影”をデザインしたむらづくりを



やさしい霧田気のトルコギキョウの花々